保育史上におけるいくつかの問題（一）

水野浩志

わが国幼稚園の創設の歴史は世界の先進国なみであるにもかかわらず、その九十年余の発達史はまことに辛苦にみちたいばらの道であった。第二次大戦後は幼稚園もようやく軌道に乗ってめざましい普及発展の方向をたどるに至ったが、戦前における幼稚園教育の発達は、他の教育機関の発達にくらべるとまことに遅々たるものであった。

その理由としては、政府当局者の幼児教育に対する積極的な振興策があまりなかったこと、幼稚園教育に対する世間一般の認識が低かったこと、幼稚園教員の資質が低く、保姆養成機関が非常に少なかったこと、幼稚園教育の効果が疑問視され続けたことなどいろいろな原因を挙げることができよう。これらの原因は悪循環的に相互関連しているが、根本的には、幼稚園が一般大衆の要求に即応して作られたものでなく、貴族趣味的伝統からなかなか脱しきれなかったことと、幼稚園教育の効果が一向に解明されなかったことが幼稚園教育不振の最大原因であったと思われる。そしてこのことは現在でもなおわが国幼稚園教育における未解決の問題として底流に横たわっているともいえるのである。

そこで、ここではわが国保育史上の一つの問題として、明治期から大正期にかけて保育界を騒がせた、幼稚園教育の要不要論、及び、保育効果の調査研究について述べてみたいと思う。

一、幼稚園教育の要不要論

幼稚園の教育はすべての子どもたちにとって必要なものか。あるいは家庭教育に欠陥のある子どもたちにとってのみ必要なものなのだろうか。この疑問は、幼稚園教育の意義をいかなるものとして把握するかということ、現実の幼稚園教育がいかに行なわれているかということから検討される問題であろう。

このような幼稚園教育に対する疑問が、公然と新聞や雑誌をに

ぎわし、教育者たちが大きな関心を示しだしたのは明治末年から大正初期にかけてであった。

幼稚園は中流階級の子弟には不要であるという主張の有力なよりどころとなったものは、京都帝国大学教授で当時教育界に君臨した谷本富の見解であった。彼は明治四〇年六月京阪神連合保育会の講演において「幼稚園というものは、家庭が善良であって、而して其母たる人が相当の素養のある人か、左なくとも母に代るべき相当の素養のある、子どもの世話をする人がある場合においては、必ずしも必要ではなかろうと思うのであります」「中流社会の家庭は子どもにとって自然の教育場であり、母親というものは天然の教育者である」ことを強調し、当時の幼稚園教育にはするどい攻撃と批判を行なっている。すなわち「幼稚園は、母から教育すべき子を奪い、母親を堕落させ、家庭の教育を破壊させる結果になりかねない。そして子どもからは質朴単純な子どもらしさを奪い、卑怯で小胆な子どもをつくり上げ、小学校に上がってからも遊び半分になり易く、真面目に課業に取組めない子どもを養成している」等々。

結論として幼稚園は上流家庭並びに下流家庭にはぜひ必要なものであるが、中流家庭には不必要というよりも現在の状態では有害ですらあることを強調した。

このような谷本富の演説は当時の保育界に多大のショックを与え、健全な家庭にとっては幼稚園は不要であり、家庭教育の欠陥を補うためにこそ幼稚園が存在すると、新聞、雑誌を通して一般に流布されたのである。

かかる幼稚園教育不要論に対し、真向から谷本説を否定反ばくしたのは、東京女子高等師範学校助教授であった和田実である。

和田実は「婦人と子ども」(第七巻第一〇号明治四〇年一〇月)の中で「今時幼稚園そのものの価値を危ぶむ人があろうとは思わなかった」と谷本に挑戦し「幼稚園は決して上流社会あるいは下流細民の子弟のみに限られた一部の人の特殊機関ではない。普通一般の家庭のためにぜひ必要なものなのである。……幼稚園は小学校以前における普通教育機関として一般に切要なるものであり、進歩せる文明国の一資格として当然のことである」と言い、「保姆諸君、幼児教育に熱心な父兄諸君は、徒らに奇矯なる論に迷わされることなかれ!」と叫んでいる。

しかしながらまた翌年の「婦人と子ども」(第八巻第一一号)において和田実は、謙虚に、従来の幼稚園教育の方法の誤りと幼稚園の教育効果の失敗を認めている。けれども彼は、それをもってただちに幼稚園そのものを否定すべきではないこと、そして幼稚園は普通一般の家庭の子どもにぜひとも必要な教育機関であることを主張している。

彼は従来の幼稚園が手技を中心として談話・唱歌・遊戯をあしらった、いわゆるフレーベル主義保育であり、無理に作業を子どもに押しつける不適当な保育だったことを反省し、これからの保育

は近代的新保育であるべきことを強調している。すなわち、総合主義的保育とでもいえるような、幼児の遊戯そのものを主体として、それを多面的に取扱い、興味を十分発展させる保育を行なうべきことを提案している。当時一般の幼稚園は谷本富の演説以来、特殊教育機関のように心得るものが多く、保姆たちも自信を喪失し、五里霧中に彷徨しているありさまだった。そのような時に、和田実は徹頭徹尾幼児の遊戯を指導することをもって幼稚園の本領とせねばならぬことを強調し、実践したのであった。

このような幼稚園教育不要論と必要論は、明治四〇年代を中心に、谷本富と和田実に代表されるような論議となって保育界を混迷に陥れたのである。しかしながらその混迷を通して、幼稚園教育関係者は暗中模索しながら従来の伝統的な形式的主知主義的なフレーベル主義保育から脱皮しはじめたのであった。

また従来の貴族主義的保育とも異なり、貧民階級のための託児所的保育とも異なった、ごく普通一般の家庭の幼児にとって必要であり、しかも楽しい幼稚園のあり方が真剣に求められだしたのである。そしてそれとともに、幼稚園教育の必要性を一般社会に如実に示すためにも、保育効果の測定が積極的に試みられはじめたのである。

二、保育効果の測定・調査

明治四二年四月、神戸市立長狭尋常小学校長田村亀太郎は、同校児童六七三人中一六二人の幼稚園卒業児童について、算術、国語、唱歌、手工の四学科の成績を比較調査し、いずれの学科においても幼稚園卒業児童の成績良好なることを調査発表している。和田実も、東京女子高等師範学校付属小学校における幼稚園経過児と直接入学者との成績を、優・劣の三等区分によって比較検討し「婦人と子ども」第九巻第一一号（明治四二年一一月）に発表している。また大阪府では、明治四四年六月、幼稚園を設置している負担区内の小学校児童を対象にして、保育を受けた者と受けなかった者の全教科の成績調査、及びその比較検討をした詳細な統計資料を発表し、保育を受けた者の方が全体として成績優良なることを示した。

このような学業成績の比較だけではなく、心理的・知的側面から保育効果の有無を全国的規模で調査したものに、水野常吉の研究がある。これは明治四二年広島高等師範学校心理学研究室の名のもとに、彼が全国各地の幼稚園数の多い地方の諸学校に調査依頼して集めた資料をもとにして、「幼稚園にて学習せし児童生徒の一般的傾向研究」として発表したものである。その詳細については、日本幼児保育史第三巻（フレーベル館発行）に抜粋を掲載してあるので、それを参照してもらうことにして、ここではその結論だけを紹介しておこう。

幼稚園保育を受けた者は、一般的傾向として意的方面（忍耐・決断・注意）に短所があり、知的面（理解・想像・学業成績）に長

所がある。幼稚園出身者は入学当時は成績優良であっても、高等小学校・中学校（高等女学校）に進むにつれ、保育を受けなかった者より成績が劣ってくる傾向がある。したがって保育の効果は永続すると思われないというような統計結果を発表している。

また幼稚園出身者に対する小・中学校教師の概評を同時に調査分類しているが、その結果は大体統計的観察と同様な結果がでている。小学校における幼稚園出身者に対する概評の主なるものを参考までに掲げておこう。

（知的方面）

長所①学業一般に佳良　②技芸科の成績よろし
③思想発表に巧なり　④理解力発達す
⑤想像に富む　⑥常識に富む
⑦世故に長ず

短所①小才子多し

（情的方面）

長所①情厚し　②社交的方面に長ず
③心情快活、動作敏活　④無邪気で愛らし
⑤団体的行動を楽しむ

短所①人になれなれし過ぎる　②わがままな行動をなす
③操行不良　④激し易く泣き易い

（意的方面）

長所①動作を快活に行ない、教授上余り教師の手をわずらわすこと少なし

短所①不注意の児童多し
②努力の習慣欠く傾向あり
③強固なる精神無し
④多弁にして他人談話中、口をさしはさむ傾向あり
⑤教師になれすぎ命令を厳格に受取らぬ傾向あり

水野常吉によるこのような調査をもって、当時の幼稚園保育の効果が客観的に測定されたとはいいがたいことはもちろんであるが、明治末期における幼稚園保育を受けた者の進学後の一般的傾向は、ある程度明らかにされたことは事実である。彼の調査では幼稚園教育の効果としてあまりかんばしい結果は出ず、むしろ悲観的結論であった。

彼はしかし、このような悲観的結果が出た原因を究明し、次のような提案をしている。

①幼稚園と小学校とがもっと密接な連絡提携をなすべきこと。
密接な提携がないために、幼稚園で聞いたことをまた聞いたり、幼稚園と同じような仕事を繰り返されるので、不注意になったり、忍耐乏しく思われる原因となる。現在の小学校は善良な幼稚園保育を参考とすべきである。

②幼稚園長は男子であることが望ましい。
幼稚園の進歩改良が遅々としている原因は、女子のみの手によって幼稚園事業が経営されていることにある。

また家庭に代わるべき幼稚園には、家庭に父母あるごとく威厳あり秩序と正説あらしめる父がなくてはならない。

現在の幼稚園出身者に男性的心的面が欠如しているのは男性を欠くことにもよる。

③幼稚園では幼児の発達に即し、小学校で教えるような、幼児に難解な事柄を授けたり、過度の業を課すべきではない。

これが学校に入ってから不注意の傾向を養成することにもなる。

④国民幼稚園の制度を作るべし。

ドイツの国民幼稚園の制度を創始することは今後の我国幼稚園事業中最大の課題なり。労働貧民階級の激増傾向下にある時、これら労働大衆の子弟にこそ幼稚園教育は必要であり、福祉的機能をもった国民幼稚園の制度こそ、国民一般の心からの願いであろう。

以上水野常吉の調査研究を大分長く紹介したが、これは明治末期における幼稚園教育界の悩みと、研究の成果の一端を語るものであり、彼の提案には現在でもなお耳傾けるべき貴重な真理が含まれている。

明治末期から大正初期にかけて行なわれた保育効果に関する調査研究は、現在からみれば幾多の不備を見出すことはできるが、このような研究がその後最近までほとんど行なわれず、保育効果の研究についての積み重ねができていなかったことは、幼稚園教育の必要性を強調する上にとって、まことに頼りないことだといわざるを得ないであろう。

明治末期において谷本富の投じた一石は、非常に大きな波紋を起こし、保育界を刺激し、保姆たちに自信を喪失さすとともに、新しい保育方法を暗中模索させながらも、脱皮を続けさせ、やがて大正期の新保育時代を迎えることになるのである。この暗中模索の保育界、とりわけ関西保育界の大混乱に光明を投じたのは、若い新進気鋭の東京女子高等師範学校講師倉橋惣三であった。

倉橋惣三は和田実にとって代わって、近代的なアメリカの進歩主義保育を導入し、大正期における自由主義的児童中心主義保育を確立していったのである。

このように見てくると、保育史上保育界をふっとうさせた幼稚園教育要不要の大論争は、結果的に見れば貴族主義的な伝統的保育を打破する上に大きな役割を果たしたものといえるであろう。しかしながらそれは、保育方法と内容における改善に終って、一般大衆の子弟の教育要求にこたえ得るだけの幼稚園教育体制の確立は未解決の課題として残されたのであった。

そして幼稚園教育の効果についての客観的、学問的な研究成果の積み上げもなされないまま、戦後の教育改革を迎えたのであった。

（都立立川短期大学）